

日本伝統舞踊の要素と構造

吉川周平

1990年7月に香港演芸学院で行われた、第5回香港国際舞踊会議に参加し、17日に“Elements and Structures of Japanese Traditional Dances”と題して、次のようなことについて、英語で発表した。

日本の伝統舞踊（以下〈伝統舞踊〉とする）のほとんどのものは、動作と音楽と言葉の三つの要素からなり、それらの機能は密接に結びついている。

〈伝統舞踊〉の基本的な構造を知るには、ユタ（南西諸島の女性シャーマン）の、次の三部構造の神まつりに見られる〈舞踊〉の分析が重要である。すなわち、その第一部は神迎えて、ユタたちは座して祈り、親ユタと言われるリーダーが太鼓を打ち、呪詞を唱える。間もなく、神がかりのために、ユタの身体はふるえのような異常な動き（以下身体の動きはウゴキと記す）を示しだし、そのウゴキは音楽につれて、手などの身体の一部から全体に拡がって、ススキなどを束ねた神聖な採り物を握り、最後に立ち上がる。第二部はこの立ち上がるところからで、ユタは神がかりによって、じっと座ってはいられなくなって、立ち上がられ、じっと立ってもいられずに、動きまわられ、手や足ばかりではなく、身体全体が動く。ユタのこうしたウゴキは、南西諸島の人びとには、人を媒体とした神の出現と信じられ、一般の人びとには〈舞踊〉と受け取られるのである。第三部は神送り、神がユタの身体から離れると、そのウゴキはおさまり、最後はまた座って終了する。

このユタの神まつりの〈舞踊〉の三部構造は、〈伝統舞踊〉のもっとも基本的な構造の基盤をなすと考えられる。例えば、多くの歌舞伎舞踊もこうした三部構造を踏襲しており、踊り手は、音楽が始まって最初はじっと座して、次に立ち上がって踊り、最後にまた座す踊りがよく見られる。

ユタの神まつりにおける〈舞踊〉は、一般的には第二部の立ち上がってからのウゴキだけだと見られがちだが、前述の三部構造の全体をもって、一つの〈舞踊〉と見るべきだと、私は考える。なぜなら、第一の部分は、音楽や言葉で動機づけして、ユタや踊り手の身体に、ふるえのようなウゴキを発生させるのに不可欠な部分であり、第三部は第二部の非日常的なウゴキを完全におさまらせるのに必要なもので、誰れもが〈舞踊〉と認める第二部だけではなく、他の二つの部分がなくては、少なくとも神まつりの行為としては、決して成立でき

ないからである。

ユタの神まつりにおける〈舞踊〉は、ウゴキと音楽と言葉の三つの要素からなる。すべての舞踊はウゴキを必要とし、大部分のものは音楽を必要とするが、言葉を必要とするものは多くはない。しかし、ユタの神まつりにおける〈舞踊〉が、言葉と音楽なしには成立できないように、座礼が基本の日本の、伝統芸能における〈舞踊〉は、歌舞伎舞踊ばかりではなく、能においても、舞い手を立ち上がらせるには音楽とともに言葉が必要であり、言葉なしには〈舞踊〉は成立しないので、〈舞事〉の部分だけではなく、一曲の能全体を一つの〈舞踊〉と考えるべきであろう。

次は〈伝統舞踊〉のウゴキの分析である。音そのものの研究を標榜した小泉文夫は、日本伝統音楽を三分類し、芸術音楽は民謡に、民謡はわらべ唄に基盤があるとし、わらべ唄はもっとも基本的な要素から構成されているので、その研究が一番大事だと考えた。ここでは詳述できないが、小泉の考え方に従って、わらべ唄同様もっとも基本的な要素で構成されている盆踊りを、民俗舞踊の中から独立させて、〈伝統舞踊〉を芸術舞踊（古典舞踊）、民俗舞踊、盆踊りに三分類し、ウゴキそのものを対象とした研究には、盆踊りの考察から始めるのがよいと考える。

〈伝統舞踊〉は〈舞〉と〈踊り〉に二分され、足のウゴキが異なる。〈舞〉は「まふ」こと、すなわち回ることを基本動作とするが、〈踊り〉は「をどりあがる」こと、すなわち跳躍が基本動作だと言う。しかし、代表的なく踊り〉の盆踊りや歌舞伎舞踊には、跳躍はほとんど見られない。盆踊りには、〈ボンアシ〉という、同じ足を二回ずつ動かす動作があり、これが左右の足を交互に動かす日常動作の歩行とは異なる〈舞踊〉のウゴキであり、跳躍しない〈踊り〉の核になる動作（以下核動作とする）である。これは本田安次氏が言う、日本の古い舞踊の足のウゴキの、踏み替え足で同じ足を二回ずつ動かして跳躍する〈ランブ（乱舞）〉の垂直運動を、水平運動化したものと考えられ、芸術舞踊である歌舞伎舞踊においては、民俗舞踊の〈ボンアシ〉のウゴキを逆にした、〈オスベリ〉がく踊り〉の核動作と認められる。

手と足のウゴキの関係は、〈ランブ〉では手は足のウゴキに従属し、〈ボンアシ〉では手は抽象的なウゴキをすることができ、〈オスベリ〉では手は足のウゴキから切り離されて、意味のある動作を見せる。つまり、〈踊り〉の核動作は水平運動化したときに、本来の性質を失って、それがあればく踊り〉だと示す一種の記号になってしまい、使用頻度が減少する傾向を持たされ、〈オスベリ〉を捨てた歌舞伎舞踊も多数でき、ついにはくオスベリ〉の意味も忘れられてしまったのである。